

令和7年度 旭が丘小学校研修実施計画

I 研究主題及び教科

研究主題	生きて働く言葉の力の育成 ～向き合う 味わう 楽しむ～
教科・領域	国語科・領域全般

II 主題設定の理由

1 これまでの研究の経過

本校児童には、自分の思いや考えをもつことや、それらを文章や言葉で相手に伝えることに課題があると考え、令和5年度から教科を国語科とし、研究・研修を行ってきた。一昨年度は、「言葉を正しく理解し、適切に表現する子」を目指し、表現する必然性を生み出す単元計画の探究として、考えを形成するための選択場面の設定を工夫し、選択のさせ方や選択させる項目の選定などを実践・検討してきた。昨年度から、上掲の研究主題を設定し、3つの柱「授業展開の工夫」「語彙や表現の獲得」「主体的な学び」をもとに、それぞれの学級、学年の児童の課題に応じた研究・研修に取り組んできた。また「国語が好き」と思える児童を育てることを大切に、日々の授業実践を行ってきた。

その結果、何を目的とした学習活動なのかを明確にすることで、その目的に向かって自分自身が学びたい問いや疑問を追究したり、必要な情報を探し、整理するためにICTやツールを活用したりして、自ら学ぼうとする児童の姿が見られるようになってきた。さらに、高学年では指示を待って動くのではなく、課題を達成するために児童同士で学び合おうとする姿が自然と見られるようになってきた。児童主体の授業を教員一人ひとりが意識してきたことで少しずつ児童の姿に変化が見られてきたのだと考える。また、語彙や表現の獲得を目的として学年に応じた「オリジナル国語辞典」や「言い換え図鑑」、「きもちずかん」などの取組を行ったことで、言葉を知り、意味を調べ、それらの言葉をどのように使うのかを考える機会をつくることができた。文章を書く時には、それらの言葉を使おうとしたり、「たのしい」「うれしい」ではなく、言い換えようとしたりする児童の姿も見られた。これらの取組を通して、言葉を知る機会を多く作り出すことができたことは、児童の語彙を増やすことにつながっており、研究主題の副題にある「向き合う 味わう 楽しむ」の第一段階である「言葉と向き合う」ことは達成できたと考える。

しかし、児童の姿から自分の言葉で思いや考えを適切に表現し、豊かに伝え合えるといった力には、まだまだ課題が見られる。国語科での学びが「生きて働く言葉の力」として活用されるには、今後、それぞれの児童の課題を明らかにし、活用を場を随所に作っていくことが必要である。その上で、昨年度の成果をもとに「言葉を味わう」「言葉を楽しむ」といった次の段階へステップアップしていきたいと考える。

2 学習指導要領とのかかわり

学習指導要領において、育成すべき資質・能力は「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性」という3つの柱で示されている。国語科における(1)の「知識及び技能」に関する目標では、言葉の特徴や使い方、話や文章に含まれている情報の扱い方、我が国の言語文化に関する「知識及び技能」を日常生活における様々な場面で、主体的に活用できる、生きて働く「知識及び技能」として習得することが重要となる。

(2)の「思考力・判断力・表現力等」に関する目標では、日常生活における人と人との関わりの中で、思いや考えを伝え合う力を高め、言葉を手掛かりにしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力を養うことが目指されている。その中で低学年では、自分の思いや考えを「もつ」、中学年では「まとめる」、高学年で「広げる」と示されており、まさに本校の児童に課題として挙げられる力であり、重点的に指導にあたっていく必要がある。(3)の「学びに向かう力・人間性等」に関する目標は、言葉がもつよさを感じること、読書をする、思いや考えを伝え合おうとする態度を養うことである。このうち、言葉がもつよさについては、低学年で「感じる」、中学年で「気付く」、高学年では「認識すること」と系統化されている。日常生活の中で毎日使っている言葉は、いわば空気のようなもので、そのよさや役割などが意識されることはほとんどない。しかし、その言葉によって、考えを深めたり、自分の思いや考えを相手に伝えたりしている。そうした言葉の働きなどを意識し、うまく説明できなくても、よさを感じたり興味をもったりすることが大切である。そして、これらの力は、他の「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」の育成を支えるものであり、国語科の力を身につける上で土台となる力であると考えている。

3 研究の主題と切り口になる教科

以上のことから、今年度も引き続き、教科・領域を国語科の全領域とし、「生きて働く言葉の力の育成」を研究主題に設定する。「言葉と向き合う 言葉を味わう 言葉で楽しむ」ことのできる国語科学習の創造を目指して、研究・研修を進めていく。国語科はコミュニケーションを図る上で基盤となる言葉の力を育むことを目的としている教科である。表現力に課題のある本校の児童にとって、学習指導要領における国語科の目標に向けて国語科の指導方法としての具体的な方策や手立てを検証していくことは、課題の改善につながると考えられる。

そこで、今年度は、昨年度進めてきた3つの柱の一つ「主体的な学び」に焦点をあて、「主体的に学ぶ子どもの姿」を目指した授業づくりを研究の基盤としていく。そして、研究の柱となる手立てとして国語科の全領域において単元計画の中に対話活動を位置づけ、対話活動における「きく」(聴く・訊く)ことに重点を置いた指導を充実させることで児童の思考が深まり、より豊かに思いや考えを伝え合おうとするのではないかと、という仮説をたて、研究・研修を進めていく。

主題にある「生きて働く言葉の力」とは、言葉を正しく理解し、順序立てて、自分の言葉で思いや考えを適切に表現できる、他者と考えを深めたり相手の心を動かすような表現をしたりして豊かに思いや考えを伝え合える力のことでありと定義する。児童一人ひとりが、楽しそうにうれしそうに言葉を使い、伝えたい思いがあふれている姿こそが「生きて働く言葉の力」の育成を通してめざす児童の姿であると考えている。そして、それらの力が、国語科のみならず、他教科、さらには日常生活のさまざまな場面で活かされるよう日々の授業実践に取り組んでいく。

副題にある「楽しむ」とは、他者との言葉の交流であったり、筆者や登場人物との対話であったり、時には、自分の思いや考えが伝わらないもどかしさなど、言葉を通して困難さを感じていることも含めたものであると捉える。「言葉で楽しむ」学習を通して「国語が好き」と思える児童を育てることを土台としていくことも引き続き、大切にしていきたい。

Ⅲ 研究内容及び方法

1 今年度の研究について

(1) 研究構想

【学校教育目標】 すべての子どもに居場所とやる気を保障できる学校

【めざす子ども像】

知・徳・体の調和がとれ、主体的・協働的に行動できる子

【研究主題】

生きて働く言葉の力の育成
～向き合う 味わう 楽しむ～

【研究目標】

生きて働く言葉の力を育むことをねらいとし、本校児童の課題である思いや考えを表現する力を育成していくことを重点目標とする。

- ① 自分の思いや考えを表現する力を育成するための指導内容や指導方法を探究する。
- ② 各教科の学習内容の定着および家庭学習・読書の推進など、児童の基礎学力の定着につながる指導・手立てを検討する。

【めざす子どもの姿】

- ① 自ら思考・判断し、自分の思いや考えを表現できる子
- ② 習得した知識、技能を積極的に活用できる子
- ③ 言葉を使った他者との協働を通して、主体的に考えようとする子

【主な研究内容とその手立て】

- 「主体的に学ぶ子どもの姿」を目指した授業づくり
 - ・児童の疑問を出発点にした課題づくり
 - ・児童自身が見通しを持って粘り強く取り組むことのできる単元計画と授業展開の工夫
 - ・児童が自己の学習活動を振り返って、次につなげることのできる振り返り活動
- 対話活動における「きく」ことに重点を置いた指導の充実
 - ・全校で年間を通した対話トレーニングの取組
 - ・各学年でつきたい力を見据えた「対話の練習」の単元の指導の工夫
 - ・単元計画における効果的な対話活動の位置づけと指導方法の実践・検証
- 学習した「言葉」を活用する場の設定
 - ・言葉の宝箱の活用、「オリジナル国語辞典」や「言い換え図鑑」の作成等、語彙や表現獲得のための取組
 - ・日記や作文、スピーチ等、前項を活用した日常的な学習場面の設定
 - ・他教科との連携を図り、国語科で得た知識や技能等を活かせる場の設定の工夫
- 基礎学力の定着
 - ・読書活動の充実
 - ・家庭学習の取組
 - ・朝学習の取組
 - ・がんばっ10の取組
- 全国学力学習状況調査・みえスタディ・チェックの分析と児童アンケートの実施

2 研修の柱となる具体的な取組

(1) 「主体的に学ぶ子どもの姿」を目指した授業づくり

国語科の各領域における主体的に学ぶ子どもの姿を以下のように定義し、これらの姿を目指した授業づくりを実践していく。

【話す・聞くこと】

① 表現方法を工夫し、自分の思いや考えを伝えようとしている姿（話す）

これは、子どもたちが自分の思いや考えを伝える際に、様々な方法を試し、改善しながら学習に取り組む姿を指す。具体的には、自分の考えや思いを伝える時、相手にしっかり伝わるように体の向きや目線を意識することからはじまり、図や表などのデータを用いること、さらに言葉選びといった表現方法を工夫すること、相手の立場や状況を意識することなどが考えられる。また、自分の考えがなかなか伝わらない場面も起こると想像される。しかし、そのような時「伝わらない」と諦めるのではなく、伝わらないもどかしさを感じながらも、様々な手法を駆使して試行錯誤し、自分の考えを粘り強く伝えようと学習に臨む姿と考える。

② 相手の思いや考えを受け止め、聞こうとする姿（聞く）

これは、子どもたちが相手の意図を意識し、相手の話の内容や思いを理解しようと積極的に学習活動に取り組む姿を指す。具体的には、相手に体を向けたり、目線を合わせたりすることからはじまり、自分の考えと比較しながら聞くこと、相手の気持ちや思いを想像したり、メモを取りながら聞くこと、相手への質問や反論を通して、相手の考えをより深く理解しようとするなどが考えられる。このようにして聞いた相手の考えを通して、自分の考えを広げたり、新たな考えを再構築したりするなど、ただ聞くだけではなく、積極的に相手の思いや考えを受け止めながら聞く姿と考える。

【書くこと】

① 相手や目的を明確に意識し、見通しをもって学ぶ姿（学習場面）

相手や目的を明確に意識し、「書く」学習活動に取り組む姿である。たとえば、日記や学習後の振り返りでは、自分のために書いており、自分の考えや気持ちを整理し、今後の学習や行動につなげるためであることをわかって書いている姿と考える。

② 「書く」ことを自分の目的を達成するためのツールとして使おうとする姿（日常場面）

日常の様々な場面において、「伝えるため」「まとめるため」に「書く」ことを選ぶとする姿である。たとえば、ボランティアの方へ感謝を伝えたいと思ったときに「手紙を書く」という方法を選択肢の1つとしてもてたり、自分の気持ちや考えを整理したいと思ったときに「ノートや紙に書く」という方法を選択肢の1つとしてもてたりする姿と考える。

【読むこと】

読む領域では、主体的に学ぶ子どもの姿を「次の活動につなげる思いを持って読む姿」と定義する。具体的に考えられる姿として

① 続きが気になる、先が読みたい、もっと知りたい

② 疑問や気づきを持ち、文章を読み返したい

③ 読後感を伝え合いたい、話し合いたい（話す・聞く活動につなげる姿）

④ 気づいたことや感想など、自分の思いを書き表したい（書く活動につなげる姿）

などの思いを持つ姿である。このような思いがあれば、次の活動（読み深める・書く・話す）にも意欲的に取り組むことができる。

また、読むことに興味や関心を持つと、自分の感想や意見、気づきを他者と共有したくなり、伝えることを意識した考えの形成にもつながる。また、読み進めながら自分の考えを形成し、次の活動に見通しをもった読み方ができるようになっていくと考える。

(2) 対話活動における「きく」ことに重点を置いた指導の充実

「対話的な学び」とは、児童同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることである。その具体化した学習活動として、あらかじめ個人で考えたことを児童同士、児童と教職員、児童と地域の人が、意見交換したり、議論したりすることで、新たな考え方に気づいたり、自分の考えをより妥当なものとしたりする活動をここでいう対話活動とする。

対話活動において、大事なことを落とさずに「きく」ことで児童は言葉の意味を考え、自分の考えと比べながら「きく」ことで、表現方法を学ぶことにもつながる。また、「きいた」ことから疑問をもつことで、どのような質問をしたらよいかを考える。つまり、「きく」(「聴く」(理解しようと自ら進んで耳を傾ける)と「訊く」(相手に尋ねる、問う))ことで「言葉」の力を向上することが期待できる。よって、対話活動における「きく」ことに重点を置いた指導を充実させていく。

- ・「きく」ことに関するスキルの掲示物を作成し、活用する。
- ・朝のモジュール学習を利用した対話トレーニングを年間、継続して行う。
- ・「対話の練習」の単元を通して、各学年でつけたい力や児童の実態に応じた指導の工夫や手立てを検討する。
- ・単元計画の中に、必ず対話活動を位置づけ「生きて働く言葉の力」を育成するための効果的な指導方法を実践・検証する。

(3) 学習した「言葉」を活用する場の設定

「言葉」を獲得していくためには、授業以外の場面でさまざまな「言葉」に触れる機会が必要である。昨年度、取り組んできた語彙や表現を獲得するための取組を継続していく。そして、それらの取組から獲得した「言葉」を使った学習活動を日常的に取り入れていくことで学習した「言葉」の活用を増やしていく。

また、国語科以外の教科・領域、場面において、国語科で習得した自分の考えや思いを表現する力を活かせる場を設定する。他教科や学級活動、委員会活動等でも応用できるようにすることが大切である。「言葉」の力は、すべての教科の中で培われるものである。国語科の枠を超えてつけたい力を育成していくことが必要である。他教科等との連携を積極的に図り、指導の効果を高める方策を模索していく。さらには、国語科の領域内や国語科と他教科との双方向のつながりが生まれるような取組も模索していきたい。

- ・言葉の宝箱の活用、「オリジナル国語辞典」や「言い換え図鑑」「きもちずかん」の作成等、各学年に応じた語彙を増やす取組を行う。
- ・獲得した語彙を使って話したり、聞いたり、書いたりする学習活動を日常的に行う。
- ・他教科との連携を図り、児童が身に付けた「言葉」の力を活かせる場の設定を工夫する。
- ・他教科等との双方向のつながりが生まれるクロスカリキュラムを検討する。

(4) 基礎学力の定着

① 読書活動の充実

- ・週2回（月・水）の朝学習で読書に取り組む。
- ・読書記録カードへの記入を徹底する。
- ・図書ボランティアによる読み聞かせを計画する。
- ・先生おすすめの本を紹介する。
- ・校内読書ゆうびんを実施する。
- ・親子読書の取組を行う。
- ・教科と連携した並行読書に取り組む。
- ・図書館で本を借りる習慣づけを各学級・学年で工夫する。

② 家庭学習の取組

- ・宿題については、授業の内容に結びついた課題（主に国語・算数）と音読を各学年・学級に応じて取り組む。ただし、音読については毎日必ず行う。音読の意義を児童に明確に伝え、児童に目的意識をもたせた音読をさせる。
- ・「家庭学習の手引き」を保護者へ配付する。家庭学習の意義や家庭での取り組ませ方、時間の目安等を保護者に周知することで、学校と保護者が一体となった基礎学力の定着の取組を推進する。
- ・学年で決められた学習時間を確保する課題を与える（家庭学習の手引き参照）。
- ・学期に1回、家庭学習強化週間の実施にあわせて、落ち着いて家庭学習を行う習慣を定着させる。強化週間中は「家庭学習の記録」を使用し、家庭学習に対する児童の意識付けを行う。
- ・3年生以上で自主学習に取り組む。学年に応じた自主学習の取り組み方について提示し、自ら課題を設定し、自主的に学習を進める力を育む。内容については「家庭学習の手引き」を活用し、めあてと約束を意識させる。また、家庭学習強化期間に合わせて自主学習強化月間（週間）を設ける。

③ 朝学習の取組

週3回（火・木・金）の朝学習は国語のモジュール学習（15分）行う。

- ・語彙や表現の獲得の取組として、言葉の宝箱の活用や「オリジナル国語辞典」「言いかえ図鑑」「きもちずかん」の作成に取り組む。
- ・全校一斉で行う対話トレーニングに取り組む。
- ・基礎学力を定着させるための取組として、よむYOMUワークシートを活用する。

④ がんばっ10の取組

- ・学習規律の定着を図るため、がんばっ10に取り組む。10項目ある中から重点目標を定め、定期的に取り組む。

(5) その他

全国学力学習状況調査、みえスタディ・チェックの結果を全職員で分担し、分析する。児童の強みや弱みを共通理解し、弱みの見られた単元・領域を、各学年で重点的に指導する。

また、児童の実態把握のため、独自の児童アンケートを作成、実施し、研究に活用する。

IV 年間計画

一 学 期	4月 1日 (火) 研修部会 今年度の組織体制と役割分担 4月 3日 (木) 研修部会 今年度の学習環境・家庭学習等について 4月 7日 (月) 研修部会 昨年度までの研究の経過 今年度の研究の方向性の検討 4月16日 (水) 第1回全体研修会 今年度の研究の方向性と概要について 4月17日 (木) 学力学習状況調査 (6年) みえスタディ・チェック (4・5年) 4月30日 (水) 研修部会 今年度の研究の取組についての検討
	5月 9日 (金) 研修部会 研修実施計画の検討 5月14日 (水) 職員会議 今年度の研究について 研修実施計画の提案・検討 5月28日 (水) 研修部会 ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析 (5月13日 (火) までに)
	6月 6日 (金) 第2回全体研修会 授業提案・事後検討会① (事前検討会 月 日 ()) 6月23日 (月) 研修部会 ※国語科に関する児童アンケート実施
	7月 7日 (月) 研修部会
	8月 4日 (月) 第3回全体研修会 1学期の振り返りと2学期の取組 8月 8日 (金) 研修部会 ※全国学力学習状況調査の結果分析
二 学 期	9月16日 (火) 研修部会 9月24日 (水) 第4回全体研修会 提案授業・事後検討会② (事前検討会 月 日 ())
	10月27日 (月) 研修部会 10月29日 (水) 第5回全体研修会 提案授業・事後検討会③ (事前検討会 月 日 ())
	11月25日 (火) 研修部会
	12月 日 () 指導教諭公開授業
三 学 期	1月 8日 (木) 研修部会 2学期の振り返りと3学期の取組 今年度の研修のまとめについて 1月 日 () 第6回全体研修会 提案授業・事後検討会④ 1月21日 (水) 職員会議 今年度の研修のまとめについて提案 3学期の取組について
	2月 9日 (月) 研修部会 2月 日 () みえスタディ・チェック (5年) 2月18日 (水) 第7回全体研修会 年間総括・来年度に向けて ※みえスタディ・チェックの自校採点と分析 (月 日 () までに) ※国語科に関する児童アンケート実施
	3月 4日 (水) 研修部会 年間総括を受けて ※研究紀要の作成

※全教員、年1回以上の公開授業を実施 ※ミニ学習会は、定期的に企画・実施の予定

<参考文献>

- ・「新学習指導要領の展開 国語編」 水戸部修治・吉田裕編著 明治図書
- ・「これからの国語科教育はどうあるべきか」 東洋館出版社
- ・「授業の見方」 澤井陽介 東洋館出版社